産経新聞　朝刊　和歌山版　2025 年 3 月 2 日

くじら日記

太地町立博物館から

マダライルカ「マナ」の成長

斑点が出現、「親離れ」も

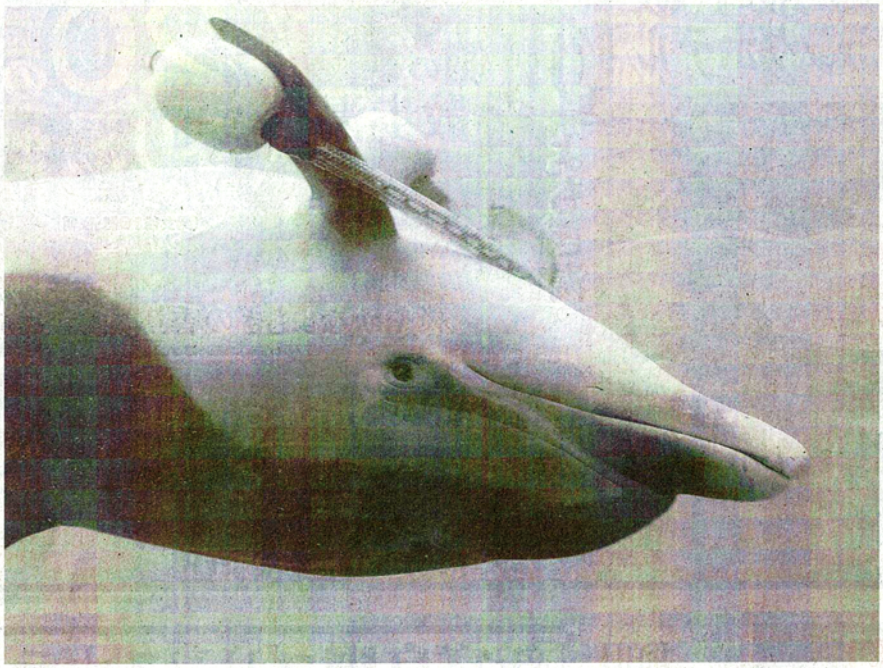
くじらの博物館生まれのマダライルカ「マナ」が令和6年7月25日に誕生から1年を迎えました。この日は「マナの誕生日会『Mana's 1st Birthday Feeding』」を開き、マナが無事に1歳になったことを祝いました。

マナを担当する飼育スタッフは、おもちゃをプレゼントしました。2つの浮きをホースでつないだもので、胸びれや背びれにひっかけて遊ぶことができます。マナが安全に、小さな体でも遊びやすいように手作りしたものです。マナは早速口先でつつき、興味を示しました。

また、食べやすいように小さく切った好物のニシンやシシャモもやりました。マナは夢中になって食べ、旺盛な姿を見せました。

スタッフは笑みをこぼしながらも「マナにとってこの1年は決して平坦な道のりではなかった」と振り返り、「特別の思いのある1歳の誕生日、元気に育ってほしい」とかみ締めるように語りました。

それは5年12月末、マナが5カ月齢の頃までさかのぼります。朝、いつものようにマナを観察すると、違和感を覚えました。よく見ると、頭の後ろにタンコブのようなふくらみがあるではありませんか。夜間に壁面か、他のイルカと強く接触してできたのかもしれません。



手作りのおもちゃで遊ぶ「マナ」。口先には黒い斑点が見られる

さらに数日後、追い打ちをかけたかのように感染症に罹（かか）ってしまいました。マナは母乳を飲むことが減り、日に日に力強さが失われていくのでした。

スタッフらは毎日のようにマナを取り上げました。注射などによる治療、そして消化がしやすいように3枚におろした魚を食道に通し、栄養を取らせたのです。マナは嫌がって抵抗したり、魚を吐き出したりすることもあって、いたたまれなくなるのでした。

一進一退する容体を見守り続けた翌年4月、マナはとうとう、自ら魚を食べました。回復に向かい、食欲が戻ってきたのです。マナの生命力とスタッフの苦労が報われた出来事でした。先述のスタッフが語った言葉には、当時懸命にマナと向き合った思いが込められていたのです。

さて、そのマナに、最近変化が見られました。口先に黒いホクロのようなものが出てきたのです。マダライルカは加齢とともに、濃い灰色の背中側には明色の、薄い灰色の腹側には暗色の斑点が出現することが知られていて、種名の由来にもなっています。いわばこの斑点は、マダライルカにとって「成長の証し」でもあるのです。

成長したのは容姿だけではありません。母親から離れ、他のイルカと遊ぶことも増えました。また、日に約2キロもの魚を食べるようになったマナは、スタッフとのコミュニケーションを通して、体温測定や採血も嫌がらずにできるようになりました。

スタッフは「今、すごく成長の変化が激しいとき、一瞬一瞬が見逃せない！」と目を輝かせました。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）